

僕の
六つ星スキルは伝説級？

外れスキルだと
追放されたので、
もふもふ白虎と
辺境スローライフ
目指します

Touma Inugami |
いぬがみとうま

ill 嘴広コウ



白虎

カイリーン王国の西方を
守護するとされる聖獣。
かつての力を失ってしまい、
今はただのしゃべる猫。

料理長

ホワイトス公爵家の料理長。
あらゆる料理に精通している。

フィン

★★★★

ホワイトス公爵家の次男で
ライカの弟。幼い頃から
ライカと比較されて
育てられる。

マウラ

鍛冶を生業とするドワーフ。
その腕前は一級品。

ニャーメイド

白虎の毛から生み出された眷属。
建築、農業、戦闘は得意だが、
料理については……

ライカ

★★★★★★

カイリーン王国の西方を統治する
ホワイトス公爵家の長男。
史上初の六つ星のスキル『ダウジング』を
授かるも、勘当されてしまう。

ルシア

★★★★★

北方の領地を統治する
タートリア公爵家の令嬢。
上品で心優しい性格。

第一章 六つ星のユニークスキル

「剣技だ！ 十歳になるまでは、とにかく剣技を磨け！」

これが父上の口癖だった。

カイリーン王国の四大公爵家よんだいこうせきけの一つ、西方を統治するホワイトス家。長男は僕、ライカ。そして、一つ年下の弟、フィン。僕たちは今日も屋敷の中庭で父上との剣の修練しゅうれんに励ほんでいる。

今は父上とフィンが打ち合いを行っているところだ。

父上の振り上げた木剣が、フィンの頭をめがけて振り下ろされる。

フィンは防御ぼうぎよしようと木剣を構えるが、九歳の腕力わたりよでは耐えきれず、父上の剣圧で潰れたカエルのように地面に這いつくばる。

「フィン、立て！ この程度防げぬようです。もうよい次！ 来いライカ！」

「はい！ 父上」

僕は二本の木剣を両手に持ち、父上と対峙たいじする。

打ち合いを始めるとすぐに、僕は先程フィンを潰した剣圧に襲われる。

僕は両の剣を頭上に構え、襲ってくる剣撃を受け流す。力の方向を変えられ地面を叩いた父上の剣を、僕は即座に踏みつけた。剣を引き抜かれる前に、僕は体を回転させて父上の頭部に水平斬りを

繰り出す。

「取ったああー！」

しかし、僕の剣は空を切る。父上は剣を引き抜くのではなく、剣から手を離し、いとも簡単に躲してみせた。

「はあ、今日もダメだ。父上には敵いません……」

「いや、すごいぞライカ！ 私は剣を離さなければやられていたし、剣を失ってしまったのだから、もう勝ち目はない。お前は天才だよ、それでこそホワイトス家の跡取りだ！」

「ありがとうございます！ 父上」

「だが、フィン……お前はダメだ。ライカを見習って、もっと努力しなければどうにもならんぞ」

父上にひどくやられて、砂まみれで座り込み泣いているフィンに、僕は手を差し伸べる。

「フィン。大丈夫だよ。お前ならすぐ強くなるさ」

「兄上……」

修練が終わり夕食の時間。長いテーブルの部屋の入口から一番離れた席に父上が座り、入口に近い席でテーブルを挟んで向かい合い母上とフィン、僕が座る。これがホワイトス家のいつもの席だ。テーブルに運ばれてくる料理は、いつものことながら見た目も盛り付けも完璧だった。

「ライカよ。来月はいよいよ神託の儀だな」

料理がそろると、父上が口を開いた。

この国の子供は、十歳になる年の六月、王都にある聖堂へ集まり、神託を受ける。それによってスキルが発現する。

スキルは人によって属性と星の数が異なる。基本四元素の『火』、『水』、『土』、『風』の属性の通常スキル。四元素の上位互換や発現することが珍しい『雷』、『闇』、『癒やし』などのレアスキル。そして、歴史上初めて確認されたスキルは、ユニークスキルに分類される。

「はい。父上」

「五つ星レアスキル。いや、お前ならば五つ星も夢ではないな」

「五つ星なんて、先々代の国王様ではないですか。僕などが……」

……三つ星でも、すごいと言われているのに。

「お前の剣の腕は既に私を超えている。きつと当代一の剣士になるはずだ。スキルが発現したら、このホワイトス領の剣士部隊長を任せるぞ。それか、王都の剣士部隊に入るのもありだな」

父上は意気揚々と話す。

軍事国家であるこの国は、スキルを使った剣技で他国を圧倒してきた歴史がある。

水属性の上位属性であり、四つ星の『氷』のスキルを持っている父上は、王都の剣士部隊長になり功績を挙げた過去があるため、僕にも剣士部隊での活躍を期待しているのだろう。

果たして、僕は神託でどんなスキルを授かるのか……

翌月になり、いよいよ神託を受けるために王都へ出発する日となった。

「いよいよ神託ね、母はライカの良い結果を待っていますよ」

「はい。母上、行ってまいります」

「ライカ、行くぞ、早く馬車に乗りなさい」

馬車にいる父上が僕を呼ぶ。馬車の方へと歩き出すと、後ろからフィンが目を輝かせて語りかけてきた。

「兄上、良い結果となることをお祈りしております」

「ああ、頑張ってくるよ。フィンは母上の言うことを良く聞いて、いい子にして待っているんだぞ」

王都へ向かうには、森の中を進む必要がある。

この国には四聖獣しせいじゆうの加護があるとされている。東西南北の土地をそれぞれ四聖獣が守っており、その加護により、この国には魔獣が寄つてこないのだという。

僕の住む西の領地は、白虎びやくこの守護があるとされているからか、ホワイトス家の屋敷の入口には、白虎の絵画が飾られている。

森の中を進んでいくと、北方の領地からの道と合流する場所で、前を行く馬車が現れた。

「きやああああ」

突然、少女の叫び声が森の中に響く。僕が馬車の窓から身を乗り出して前方を確認すると、そこには魔獣によつて喉元を食いちぎられた馬が横たわっており、前の馬車を取り囲む五匹の大きな狼

のような魔獣が見えた。

この辺りにいるはずがない魔獣が、前を走る馬車に襲いかかっているのだ。

「父上！ 魔獣です。前の馬車が……」

「魔獣だと……あり得ぬぞ、森の奥ならまだしも、この地域に現れるなんて」

僕が馬車を飛び降りると、襲われている馬車から年老いた執事が剣を携たずえ出てきた。

彼が剣を構えると、柄を握る手が赤く光り出す。その光が剣身へと移り炎へと変わる。

スキル……『火』の属性か！

老執事の剣がゴォオつと音を立てて、狼型の魔獣に振り下ろされる。しかし、魔獣はそれを軽く跳躍して躲し、老執事の刃は空気を焼くだけに終わった。

その隙を見逃さず、後ろに控えていた魔獣が老執事に襲いかかり、剣を持つ腕に咬み付く。そのまま首を左右に振り、老執事の腕を引き裂いた。

「ぐあああ」

手から離れた剣は炎が消え、地面に転がる。

このままではあの人が死んでしまう。

僕は双剣を鞘から抜き、老執事に咬み付く魔獣に斬りかかる。僕の剣が直撃した魔獣は、老執事の腕を離し後退あひすまる。

……斬れない。魔獣というのはこんなに硬いものなのか。

標的を僕に変えて飛びかかってくる魔獣に、今度は双剣での突きを食らわせる。刃は魔獣の毛皮

を微かに貫く程度のダメージを与える。

致命傷を与えることはできなかったが、魔獣を老執事から引き離すことはできた。しかし、気がつけば五匹の魔獣が僕を取り囲み、距離を詰めながら牙を剥き威嚇してくる。僕の剣では魔獣を倒すことはできない。膝が震える。吸う息も、吐く息も震えている。僕は恐怖しているのだ。

次の瞬間、僕の背後から氷の刃が飛び出し、遅れて冷たい風が吹き抜ける。氷の刃は五匹の魔獣に刺さり一瞬で絶命させた。

振り向くと、スキルを放った父上が立っていた。

す、すごい……これが父上の四つ星のスキルの威力か。

「大丈夫か、ライカ」

「はい！」

「お前は、本当にすごいな。スキルなしで魔獣に傷をつけるとは……未恐ろしい子だ」

「それより父上！ 怪我人を」

父上が、怪我をした老執事の手当をしていると、馬車から少女が降りてきた。

綺麗な深い緑色の髪をした少女が、震えながら口を開く。

「あ、ありがとうございます。助かりました。当家の執事の容態は……」

「ああ、命に別状はないが、この腕は……もう剣を握ることはできないだろうな」

父上は目を瞑り、首を横に振りながら答える。

「そうですか、でも、命だけでも助かって良かったです。本当になんとお礼を言えばよいか」
僕と同じくらいの年頃の少女、おそらく彼女も神託を受けに行くのだろう。とても上品な振る舞いから、良いところの令嬢だとわかる。

「ふむ。馬も潰れてしまっているな。我らの馬車にお乗りになるがよいだろう」

父上の提案で、彼女は僕らの馬車と一緒に乗ることになった。

「助けていただきありがとうございます。私は北の領地、タートリア家のルシアと申します」

「おお、タートリア公爵家のご令嬢か。私は西のロイド・ホワイトス公爵である。これは長男のライカだ」
ルシア・タートリア。北方の公爵家の令嬢と一緒に、僕は神託を受けるために王都へと向かった。

王都の神殿では、神託の儀が行われている。

二日間にわたって行われる神託の儀は、初日は平民の子供たちの神託が行われる。

各自の名前が呼ばれ、司祭から神託を言い渡されるのが流れた。

神台の天井から下りてくる光の色によってスキルが判別され、光の強さによって星の数が決まる。原因はわからないが、平民がレアスキルや三つ星以上の神託を受けることは滅多にないそうだ。

今日は二日目、貴族の子供たちの神託の儀だ。これが領地経営、爵位にまで影響すると、自然と注目が集まる。神殿の壁際に並ぶ席では、貴族の当主たちが我が子を見守っている。

今年は、例年のないほど三つ星スキルの発現が頻発したらしく、神殿には度々感嘆の声が響いた。

「ルシア・タートリア。こちらへ」

道中で出会い、一緒に神殿まで来たルシアが司祭に呼ばれた。

彼女が神台の前に立つと天井から光が降り注ぐ。今までの者とは明らかに違う色と光の強さ。

「おお！ レアスキルだぞ」

「おおお！ さすが公爵令嬢だ」

神殿中がどよめく。ルシア本人も驚き狼狽ろうたえている。

「レアスキル、『癒やし』……い、五つ星」

司祭が唇を震わせながら宣言する。

「先々代の国王以来の五つ星だぞ！」

「二「おおおおお！」」

参加していた貴族の誰かがそんなことを叫び、神殿の歓喜の声と熱気は頂点に達する。実に百年ぶりに発現する五つ星だ。更にレアスキルである。特に『癒やし』が出現することは稀まれであり、星の数を問わずとも、王都に数えるほどしかない。

しばし神殿は興奮に包まれ、「静粛せいしゆくに」と大声を出す司祭の制止も意味をなさなかった。

「ライカ・ホワイトス。こちらへ」

やっと静寂を取り戻した神殿に、最後の一人である僕の名前が響いた。

僕は、なんの神託を受けるのか。膝が震え、心臓の鼓動が聞こえる。

なんだ！ この光の眩しさは！

目を開けているのがやっとだ……けど、なんて綺麗なんだ。

僕に降りかかる光は、先程のルシアのものより眩まばゆく輝き、目を開けていることもままならないほどだ。

光が収まると、司祭が神託を伝える。

「こ、これは……ユニークスキル『ダウジング』？ む……」

「ユニークスキルだと？」

「『ダウジング』？ なんだそれは」

神殿のあちこちから困惑の声が聞こえる。

しばしの間司祭が言葉を失ったかと思うと、ごくりと生唾なまつばを呑み込む音が聞こえた。

「……六つ星」

「何？ 星いくつだって？」

冷や汗を滴らせた司祭が再度、星の数を高らかに叫ぶ。

「六つ星!!」

「なんだって!? そんな星の数聞いたこと無いぞ。間違いないのか？」

「ま、間違いない。六つ星だ！」

神殿には、歓声と混乱が入り混じるような声が湧き、鼓膜が破れそうなほどの騒ぎ様だ。

この国の初代国王が授かったスキルも、建国以来二百年、他の誰にも発現していないため、ユニークスキルに分類されているらしい。

しかも、今までどのスキルでも五つ星までしか発現しなかった。つまり僕は史上初の六つ星ということになる。まさか僕がそんな神託を受けてしまうとは。

神託の儀で六つ星のユニークスキルを授かった僕は、その後、神殿に集まった人々に囲まれたが、なんとか人の波をかくぐり逃げるように神殿をあとにし、馬車に乗り込んだ。

「ライカ！ お前には本当に驚かされてばかりだ！ 史上初の六つ星、しかもユニークスキルとはな」

「はい。自分でもいまだに信じられません」

「これで我がホワイトス家は安泰だな！ はっはっは」

父上は、初めて見るほどの上機嫌ぶりだった。喜んでくれる父上を見ると、幼い頃から父上の言いつけを守り、剣の修練や勉強に励んで来たのが報われる思いだ。

「ルシアといったか、タートリア家の令嬢。あの娘が五つ星のレアスキルを授かった時には驚いたぞ。だがしかし、さすがは我が息子だ。それを上回るスキルを授かりおった」

「自分でも、驚いています」

「これから、国中の貴族が、お前のもとを訪れるぞ。近くスキルのお披露目をしなくてはな」

屋敷に戻るまでの馬車の中で、父上はこんな調子でずっと僕を褒めてくれた。

神託の儀から数日。

うーん。それにしても『ダウジング』って一体なんだろうか。

屋敷の書庫を片っ端から調べたが、『ダウジング』に関する記述は見つからない。父上曰く、剣にスキルを付与すると神託を受けた属性の技が発動できるらしいのだが。

「剣にスキルを……んぐぐぐぐ」

たしかに、力が流れるのは感じるし、剣も強く光っている。だが、何かが発動している感じはまったくない。

こればかりは、誰かに教わるものではなく、一人で修練するしかないのだそうだ。

「何も効果が表れないのに……疲れるなあ、スキルって。今日はここまでにするか」

このあとはスキルの修練でへとへとになった僕にとつての至福の時間、食事の時間だ。

テーブルに着くと、父上が僕に尋ねてくる。

「ライカ。どうだ？ ユニークスキルの方は」

「『ダウジング』がなんなのかわからなくて……いまだ、これといった手応えを感じません」

「そうか……まあ、気にするな。お披露目会まではまだ時間がある。天才のお前ならできるさ」

それから、修練に励む日々が続いた。最初の頃に比べて、スキルを流し込んだ時の剣の光は、格段に強くなっていた。この調子で続ければいつかはできる、今は信じて続けるしかない。

「兄上、スキルはまだうまくいかないの？」

修練場にやって来たフィンが僕に話しかける。

「ああ、まだまだだね。だけど頑張るさ。努力は必ず実るからね」

「うん。応援してる！ 僕も兄上を見習って頑張るよ。父上は僕のことなんて興味ないみたいだけど……」

父上が僕を鼻^{ひいき}肩^{かた}しているのは事実だろう。剣技は既に父上以上、それに、史上初の六つ星のユニークスキル持ちだ。

社交界でも、父上は随分鼻高々だと仰^{おちき}っていた。

「大丈夫さ！ お前も来年、良い神託を受けるはずだよ。僕の自慢の弟なんだから」

「うん！ そうだ、兄上、久しぶりに剣の相手をしてよ」

「うん。いいよ！ やろうか」

手合わせすればわかる。フィンの剣筋は悪くない。着実に剣は上達している。

この日、僕たちは日が暮れるまで修練を続け、兄弟水入らずの時間を過ごした。

更に二ヶ月が経った。今日、遂に僕の授かったスキルのお披露目会が行われる。

領地の貴族や豪商たちがホワイトス家の屋敷に招かれ、パーティが始まる。

会場には料理長の自慢の料理が並び、皆が舌鼓^{しつづみ}を打っている。

「皆様、今夜は我が息子、ライカ・ホワイトスのスキルお披露目会に足を運んでくれて感謝する^{らいか}」
来賓^{らいひん}たちが一斉に父上に注目する。

「今夜は史上初の六つ星。更に、初代国王以来のユニークスキルを皆様にお披露目する」

「おおお！ まさか初代国王を超えるスキルを生きているうちに見られるとは」

「六つ星だぞ！ いったいどんなに素晴らしいものなのだろう」

来賓たちは次々に期待を口にする。父上は、僕の肩に手を乗せ優しく微笑む。

「さあ、ライカ！ 準備はよいか？ 皆様、修煉場へご移動願おう」

修煉場の中央で双剣を携え立つ僕に、大勢の来賓が注目している。

正直、自信はない。スキルを授かってから三ヶ月、今まで一度もスキルの発動が成功したことがないのだ。最近では何か掴めそうな感じはするんだけど……

父上や、母上、フィンも僕に注目している。目を輝かせて僕を見つめるフィンと目があった。

大丈夫。かっこいい兄の姿を見せてあげるさ。

そんな意味を込めて、僕はフィンにウインクをして見せる。

キイイイイイン。

意識を集中させると両手の剣が光り出す。その光は徐々に輝きを増していく。

大丈夫。僕はいつも本番に強い。

光は剣に収束し、剣身そのものが七色に輝き出す。

「おお！ なんと神々しい」

「こんなに美しい光は見たことがないぞ」

発動！

心の中で叫ぶと、二本の剣が宙に浮く。

「おお！ 剣が浮いている！ 何が起こるんだ」

浮いた剣は空中で震え始め、地面に落下した。二本の剣はまるで転んだ子供が立ち上がるように起き上がり、ヨチヨチ歩きをする赤子のように歩き出す。

「へ？」

「は？」

哑然とする群衆はしばらくの間沈黙しながら、二本の剣が歩く姿を見つめている。

「ぷっ」

やがて群衆の一人が吹き出すと、つられるように皆が笑い出す。

「はっははははは」

「宴会芸じゃないか」

「ダメだ、やめてくれ、腹が振れる」

「ユニークスキルってユニーク過ぎる、の間違いじゃないか？」

「やめろ、誰が上手いこと言えと。あっはっは」

修練場に大爆笑が巻き起こる。父上を見ると、顔を真っ赤にして、身を震わせている。

僕は家名と父上の顔に泥を塗ってしまったことを瞬時に理解した。

昨日のお披露目会では大失態だいしつたいをしてしまった。話しかけづらいけど父上に謝らなければ。

「父上……あの……」

「なんだ。ライカ」

冷たい視線で僕を見下ろす父上は、まだ怒っているのだろう。あれだけ大勢の前で大恥をかかせられたのだから。

「昨日は、ごめんなさい。うまくスキルを使いこなせなくて……」

「いや、私も機嫌を悪くしてすまなかった。お前なら、ちゃんと六つ星のユニークスキルを使いこなせるようになるだろう。精進しなさい」

しかしその後、父の言葉もむなしく、進歩がないまま、僕は『ダウジング』が一体どういうものかわからない毎日を過ごした。

あれだけ期待していた父上も、進歩がなく不甲斐ない僕に、日々苛立っているのが表情や態度から見て取れる。

お披露目会から早三ヶ月。僕はいまだにスキルを使いこなせないでいた。

「今日のメインは、オマール海老の白ワイン蒸しでございます」

「……」

料理の説明をする料理長さんの言葉がむなしく響いた。

僕のお披露目会までは楽しかった食事の時間は、今では居心地の悪い時間へと変わってしまった。

「あと半年で、フィンの神託だな」

「はい、兄上のように六つ星を授かりたいですね」

「ふん、剣がヨチヨチ歩きするだけの、宴会芸のようなスキルをか？」

父上は僕を睨みつけながら吐き捨てるように言う。

「あはは。まさか、あれならば平民のように一つ星の方がマシです」

本当に居心地が悪い。こんな美味しい料理なのに……

「……ごちそうさまです」

僕は居心地の悪さに耐えることができず席を立つ。

父上の鼻屑はフィンに移り、フィンも僕を馬鹿にし始めていた。

それから僕は、修練場の端っことでスキルの修練を続けた。

キイイイイイン。

眩く輝く光を纏った剣は浮かび上がり、次の瞬間には相変わらず地面をヨチヨチと歩き出す。何が六つ星のユニークスキルだ！

「あははは。本当に、ユニーク過ぎる」だよ……僕のスキルは」

こんなことなら、四つ星でも、いや、三つ星でもよかった。ユニークスキルなんていらなかった。

僕は、父上に褒めてもらいたかっただけに……

僕が一人で食堂のテーブルに突っ伏して落ち込んでいると、お皿を置く音がして、オムライスの

香りが鼻腔をくすぐった。

「あ、料理長さん」

「ライカ坊っちゃん、お悩みごとがある時は、まず腹ごしらえですよ」

「ありがとうございます」

久しぶりに優しい笑顔を向けられた気がする。

僕はオムライスを食べながら、涙を堪えていた。

「……さて、私の昔話でもしましょうか」

一つ星、『火』のスキルを授かった料理長さんは、幼い頃からの夢であった剣士になることを諦めたようだ。貧しい家だったので、働きに出て色々な職を転々としたのだが、賃金はわずかで薪が買えないほど困窮していた。冬、家の中は、ただでさえ寒いのに、硬いパンと冷たいミルクの食事。両親や兄弟は、震えながら食事をしていったんだそう。

「……その時です！ 私はスキルを剣ではなくてフライパンに付与してみたんです」

「それでどうなったの？」

「フライパンは熱を持ち、薪がなくても料理が作れることに気がついたんです」

「わあ、すごい！ 料理長さんの肉の火入れは、スキルで調理しているから完璧なんだね」

「ふふふ、ありがとうございます。要は、自分に適したものを見つければ」ということです。それを坊っちゃんにお伝えしたくて、さ、オムライスが冷めないうちに食べて、早く前のような明るく洗刺としたライカ坊っちゃんに戻ってくださいます」

「ありがとうございます！ ……自分に適したもの」

料理長さんの一言で、僕は何かが掴めそうな感じがした。

それから半年、僕は未だ『ダウジング』の正体がわからず、剣をヨチヨチと歩かせていた。フィンが神託を受けるために王都へ出発する朝、僕はフィンに声を掛けた。

「フィン、良いスキルを授かるように、祈っているよ！ 行ってらっしゃい」

「祈るなんて、やめてくれないかな兄上。グニーク過ぎる」を授かったらどうするんだよ」しかし、こんな会話しかできなかった。

三日後、フィンは四つ星のレアスキルの『絶対零度』を授かり、屋敷へと戻ってきた。

それからずっと上機嫌な父上と母上は、早速フィンのお披露目会の準備に取り掛かり、フィンの神託から二ヶ月後、お披露目会の日になった。

「皆、我が息子、フィン・ホワイトスのお披露目会に足を運んでくれて感謝する」来賓たちが、一斉に父上に注目する。

「我が息子の四つ星レアスキル、私のスキル『氷』の上位属性『絶対零度』をお見せしよう」

「おお、レアスキルか！ ……まさか、去年のご長男のようなことはあるまいな」

「ははは、あれは傑作でしたな」

僕は宴会場の端で来賓たちの言葉を、なんとか笑顔で受け流す。

皆が宴会場から修練場へ移動すると、フィンは注目の中、自信満々で剣にスキルを付与する。

キィィィィン。

次第にフィンの持つ剣が冷気を纏っていく。

『絶対零度』のスキルが付与された剣を振り下ろすと、凄まじい速さで氷の刃が飛び出し、的として用意された分厚い鋼鉄の鎧を貫いた。更に、的を貫通し地面に突き刺さった氷の刃は、周囲の地面を凍らせている。

すごい……父上の『氷』のスキルとは比べ物にならない威力だ。

「なんだ！ この威力は」

「戦場の英雄と言われたホワイトス公爵のスキルよりすごいではないか」

会場の貴族たちからも驚きの声が上がる。

満面の笑みを浮かべる父上。冷たく笑いながら勝ち誇ったような視線を僕に送るフィン。

この日催されたフィンのお披露目会は、大成功で幕を閉じた。

第二章 追放と白虎との出会い

「さて、そろったな」

お披露目会の翌日、執務室に呼ばれた僕とフィンに向かって父上が口を開く。

「先程、決めたんだがな。このホワイトス公爵家の次期当主はフィンにすることにした」

ああ、それはそうだよな。わかっていたさ。

「で、ライカ。お前のような者がいると、フィンの足を引っ張ってしまっからな——勘当だ」

……え？ か、勘当？

「離れてはいるが北に別荘がある。そこをお前に与えるから、近いうちにこの屋敷を出ていけ」

「な、父上。それはさすがに」

僕の反論にフィンが言葉を被せる。

「父上は優しいなあ。兄上なら別荘なんてなくても大丈夫さ。六つ星のユニークスキル持ちなのですから」

「フィン。まあそう言うな。せめてもの温情だ。ライカよ、なるべく早く出ていくのだぞ」

執務室を出て、僕は荷物をまとめた。と言つても剣二本と地図。それにナイフとランプ、ロープ

を鞆かばに詰め込む程度しかない。ずっと屋敷に住んでいた箱入りの僕だ。何を持っていけば良いのかなんてわからない。

さあ、出ていくか。

「見送りは……あはは。誰もいないや」

門をくぐり歩き始めると、背後から僕を呼ぶ声が聞こえる。

「坊っちゃん！ ライカ坊っちゃん」

「料理長さん」

「さみしくなります。こちら、道中にお召し上がりください」

手渡されたのはお弁当だった。皆が僕に対して冷たく接しても、料理長さんだけは優しくかったな。

「ありがとう。またどこかで会えたら……さようなら」

「ライカ坊っちゃんのお力になれずに申し訳なく思っております。どうか、お元気で……」

料理長さんはいつまでも門の前に立ち、僕を見送ってくれた。

屋敷から出てしばらく街道を進み森へ入る。僕は道の端にある岩に腰掛け、鞆から地図を取り出し広げた。

「えーっと別荘はどこにあるんだ？ ……東北の森を抜けた先か」

別荘は随分と遠い場所にあるな。しかも、森には最近まで出現することがなかった魔獣が出ると聞く。

まさか、父上は魔獣が出ると知っていて、僕をわざわざ森の先にある別荘に……
「ガルルルルルル」

早速、魔獣のおでましか……まだ、こちらに気づいていないな。念のため双剣を構えて、気配を消して見つからないように進もう。

熊のような形をした魔獣は赤い鬚たぐみを生やしている。何かに夢中になっているようだ。よく見ると、前足で小さな虎柄の白猫を押さえつけている。

かわいそうに……スキルを使えない僕では魔獣には歯が立たない。いや、背後から不意打ちで魔獣の弱いところを狙えば……

「弱点があれば……どこだろう……あの魔獣の弱点」
キイイイイン。

握っている二本の剣が七色の光を纏い、浮かび上がる。

次の瞬間、剣は僕の手から離れ魔獣に向かって飛んでいく。その速さは目で追うのがやっとで、流れ星のような光の尾を伸ばす。

それは一瞬の出来事だった。二本の剣は熊のような魔獣の脇腹に刺さり、そのまま心臓を深々と貫いたかと思うと、魔獣を絶命させた。

「な！ なんだ！ 僕は何をしたんだ……」

何が起こったのかはわからないが、白猫はまだ息があるかもしれない。

僕は白猫に駆け寄った。

「ひどい、傷だ……大丈夫？」

力なくぐったりしている白猫を、僕は抱きかかえる。

魔獣の爪で引き裂かれた傷からは血が流れている。虚ろな目をして気を失いかけている白猫を、僕は優しく撫でる。

「……タ……ビ」

「ん？ タビ？ 変な鳴き声の猫だな」

「マタ……タビ……石」

「マタタビ？ コイツ、人語を喋っているのか？」

空耳ではない。今はつきりと「マタタビ石」って言ったぞ。

「マタタビってなんだ？ おい！ 猫」

「人間よ……マタタビ石をよこすニヤ」

やっぱり人語を話している。だけど、マタタビってなんなんだろう。聞いたこともない。

僕は、そつと白猫を地面に下ろし、とりあえず、魔獣の心臓に突き刺さった、まだ光っている二本の剣を抜く。

「マタタビ石かあ。なんだろう。マタタビ石……マタタビ石」

キイイイインという音がして、剣は再び僕の手を離れ、森の草木に向かって飛んでいった。

「あ！ どこに行くんだよ！ 僕の剣」

剣を追いかけ、飛んでいった方向に走っていく。僕のスキルは暴走しているのだろうか。さつき



も勝手に魔獣に向かって飛んでいったし。でも、すごい威力だったな。あの分厚い毛皮を貫いて、心臓を一突き、いや、二突きだったもんな。

「おーい！ 僕の剣ー！ どこ行っちゃったんだよおお」

一体どこまで飛んでいったのだろう。方向は間違っていないと思うのだけど、なかなか剣が見つからない。

更に十分ほど歩いただろうか。やっと、地面に深々と刺さった二本の剣を見つけた。

「あった！ って、どんだけ深く刺さってるんだよ」

剣を抜こうにも、こんなに深く刺さっていたら簡単には抜けない。

「ダメだ……僕の手じゃ抜けないや。あ……」

昔、料理長さんに教わったロープの結び方があったっけ。滑車の原理で重たい物も簡単に持ち上げられるってやつ。

僕は鞆からロープを出し、木の幹に回してから剣の鏢つばにくくりつける。すると、どんなに力を込めても抜けなかった剣がいとも簡単に抜けた。

「よし！ 抜けたぞ」

ん？ なんだこれ？

掘り返された土と一緒に、緑色に輝く鉱石らしきものが地面に転がっている。

「綺麗だな。よし持って帰ろう。高く売れるかもしれないし」

剣と鉱石を回収した僕は、白猫のもとに戻る。あの傷だ。もしかしたらもう死んでいるかもしれ

ないな……

そう思いながら来た道を戻った。

「おーい、白猫ー。まだ生きてるかー？」

近寄ると、地面に横たわる白猫は小刻みに震えている。よかった、まだ息があるみたいだ。ほっとすると同時に、僕の背後の草木がガサガサと音を立てる。まさか、まだ魔獣がいるのか！慌てて振り返ると、先程の魔獣の倍以上の大きさはあるだろう大熊のような魔獣が現れた。

僕は驚き、思わず尻もちをついてしまう。その反動で手に持っていた緑色に輝く鉱石は転がり、横たわる白猫の鼻先で止まる。

やばい、でかい……やられる！ 蛇へびに睨にらまれた蛙かえるの気持ちかわかる。体が全く動かない。

「っ!? マタタビ石ニヤ」

鉱石の臭いを嗅いだ白猫はいきなり元気な声を出すと、鉱石に齧かりついた。瞬間——ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ。

白猫の体から霧のようなものが吹き出し、辺りを包み込む。

濃霧に包まれて良く見えないが、白猫がいた方向には大きな影が見える。

「な、なんだよ！ 次から次へと」

霧が晴れると、そこには熊の魔獣より遥かに大きい白い虎がいた。

このバカでかい白い虎はどこから現れたんだ？ 熊の魔獣への恐怖が吹き飛ぶほどの存在感だ。

「グルルルル。久しぶりにこの姿に戻れたわ」

「え……え……」

「おい、人間。マタタビ石をもつとよこせ」

白い虎は僕に話しかけるが、答える間もなく、熊の魔獣がいきり立ち猛然と僕に襲いかかってくる。

「ま、待って、そんなことより魔獣が……」

「あ？ 魔獣だと？」

白い虎はフンと鼻から息を吐き、面倒くさそうに魔獣に視線を向けると同時に、前足を振り抜く。その前足が僕の頭上すれすれを通り抜けると、吹き飛ばされそうなほどの風圧が巻き起こった。

「ふん、小さな毛玉ごときが、我の話の腰を折るなぞ……実に不快だ」

魔獣を見ると、白い虎の爪により細切れの肉塊にくかたになって、地面に散らばっている。

「さあ、小うるさい毛玉はいなくなつたぞ。おい、人間。我にマタタビ石をもつとよこすのだ」
「マタタビ石って、さっきの緑の石のこと？」

「そうだ！ まだあるのだろう。早く我によこせ。さもなければ細切れにするぞ」

「いや、もう無いんだよ。ごめん」

「なんだと！ 嘘をつくとお前も肉塊に変えるぞ」

白い虎の言葉は、一言一言が僕の体内に重く深く響く。

「落ち着けて、本当に無いんだ」

「役立たずが。もういい。お前も死ぬ！」

虎が僕に向かって鋭い爪を振り下ろす。その迫力と覇気に、僕は体を動かすことができずにただ目を瞑ることしかできなかった。

ポフッ。

「へ？ ポフッ？」

頭に小さく柔らかい肉球の感触がある。

恐る恐る目を開けると、目の前には、もふもふとした虎柄の白猫がいる。

「ウニャアア！ せつかく本来のニャレの姿を取り戻したはずニャのに、また猫の姿に」

「……あははは！ お前、ふわふわしていて可愛いな」

「おい、人間風情がニャレのことを可愛いだど!? 切り裂いてやるニャ」

小さくなった白い虎は両前足の爪で僕を引っ掻こうとするが、僕に首根っこを掴まれて爪は虚しくも空を切るだけ。

「ふう。もういい。ニャレは疲れたニャ」

「お前、一体、なんなんだ？」

「よくぞ聞いてくれた。聞いて驚くのニャ！ 三千年前より、この地を守護している白虎様とはニャレのことニャ」

「やっぱりか。あのでかい姿、ホワイトス家に飾ってある絵画の白虎そのものだったもんな。

「で、なんで猫になったんだ？」

「マタタビ石が枯渴こかつしたせいニャ。更に、この五百年めつきり『ダウジング』の使い手が現れなく

てニャ……」

「お前、『ダウジング』のことを知っているのか！」

「ウニャ。さつき、お前が使ってたあれニャ。久しぶりに『ダウジング』の使い手に出会ったニャ」

ユニークスキルの『ダウジング』を知っているなんて。三千年生きているというのも、あながち嘘ではなさそうだ。

「すごいニャ。お前……六つ星じゃニャいか」

「え？ わかるの？」

「当たり前ニャ。ニャレは神に等しき存在ニャ」

「『ダウジング』のこと、教えてくれない？」

白虎はあぐらをかき、僕に目の前に座るように手招きをする。

「さて、色々教えてやるかニャ」

「お願いします。小白虎先生！」

「誰が小白虎ニャ！ んん、まあいいニャ。まずはどこから話すかニャあ」

——小白虎曰く、この大陸に四聖獣と呼ばれる四柱が存在しているのは事実らしい。

それら四聖獣を束ねる瑞獣ずいじゅうが人々の繁栄のために、神託を授けているとのこと。

四聖獣が力を保つには、マタタビ石のような聖石が必要で、瑞獣は定期的にそれを見つけ出すことができる『ダウジング』のスキルを神託で授けていたのだとか。

しかし、五百年前に四聖獣と瑞獣が敵対するようになった。

瑞獣は、四聖獣を弱体化させるために神託の際、人間に『ダウジング』のスキルを授けないようにした。

「……だから、ニヤレは四聖獣の力を失い、こんな姿でしかいられなくなったのニヤ」

「へえ、じゃあ、なぜ僕は『ダウジング』を授かったのかな？」

「そんなニヤのは知らん。瑞獣の気まぐれか、はたまたボケて間違えたのか」

四聖獣や瑞獣のことはあとで詳しく聞くとして、それよりも今は、僕のスキル『ダウジング』の正体がわかったことが嬉しい。探し求める物の方向を示す、いわばコンパスみたいなものだろう。

「ちなみにニヤ。お前、剣で『ダウジング』をするなんて効率が悪いニヤぞ」

「え？ そうなの？」

「あんな重い物を動かすなんて、六つ星だからできる芸当だニヤ」

「剣じゃないなら、どんな得物えものがいいのかな」

剣士部隊に入ることを目標として生きてきたから、剣以外にスキルを付与しようなんて今まで考えたことがなかった。

「それはニヤ……追々おしえてやるニヤ」

追々って、まさか、コイツ僕についてくる気なのか？

「さて、マタタビ石も探さないといけないしニヤ。人間、そろそろ行こうニヤ」

「やっぱり、ついてくる気かよ」

「当たり前ニヤ。お前、名前を教えるニヤ」

「僕は、ライカ。ライカ・ホワイトス」

「ホワイトス……ウニヤ。なんか聞いたことある名前だニヤ」

「え、小白虎は僕の家のことを知ってるの？」

「誰が小白虎ニヤアア！」

こうして小白虎が僕に同行することになり、別荘を目指す、まだまだ道のりは長い。

今日は野営をする。魔獣がいる森の中で寝るのは不安だが、スキルで倒せることがわかったのでなんとかなるだろう。

開けた場所で火を焚き、料理長さんが作ってくれたお弁当を広げた。

「おい、小白虎。たまごサンド食べる？」

「ふん、人間風情のエサをニヤレが食うはずニヤかろう。マタタビ石ニヤ、マタタビ石をくれニヤ」

「やだよ。もう暗いし、疲れたし」

「それニヤらもう、オシッコして寝るニヤ」

小白虎は木陰に行き用を足すと、後ろ足で器用に土をかける。

「お前、本当に白虎か？ オシッコの仕方、ただの猫にしか見えないぞ」

「うるさいニヤ！ どうしてもやってしまう習性なのニヤ」

「あはははは」

「笑うニヤ！ ひき肉にしてしまうぞ」



我はどうやって生まれたのだろうか。もしくは誰かが我を、創造したのだろうか。気付いた時には、人間たちにこの西の地を守護する白虎と崇められていた。

魔獣が単食うこの地は、歩けば魔獣が襲って来おったな。懐かしい。

爪を振り下ろせば裂け、尻尾を振れば彼方まで吹き飛んでいくような、弱くて邪魔な魔獣どもを蹴散らす毎日であった。

昔はそこら中であつた、私の好物であるマタタビ石。

高純度のアレは美味であつたな。

我はアレさえ食べれば、他には何もいらなかつた。

散歩がてら北の地にまで足を伸ばしてみたことがある。そこで出会つたのが、玄武げんぶという、あの化け亀だ。

でかい魔獣だと思つて引っ掻いてやつた時の、あやつの硬さには驚いた。

同時に、同じ聖獣であることを理解した。

あやつのが好物はなんだったかな。

友と呼べる存在を知つたのはその時だった。

あれはいい時代だった。

溢れるマタタビ石に囲まれて、我が物顔でこの地を闊歩くわほして。だが、それもこれもあの瑞獣のせいだ……



「……きろつて」

「んニヤ？ ライカか」

「小白虎！ いい加減起きろつて！」

朝になつて白虎を起こそうと隣を見ると……コイツは本当に四聖獣か。ヨダレを垂らしながら魔まされている聖獣なんて……

「フニャアアア。よく寝たのニヤ」

「そろそろ、出発するぞ！ 小白虎」

「誰が小白虎ニヤ！ 元の姿に戻ったら切り裂いてやるニヤぞ！」

「へー。それならマタタビ石探してやるわけにはいかないな」

「待てニヤ！ それは困るのニヤ」

焚き火の後始末をし、僕は別荘に向けて出発する。

野営の寝心地は最悪だった。地面に体温を奪われて、寒さで夜中に何度も起きた。

公爵令息として贅^{ぜい}沢な暮らしをしてきたからな。

これからはこの生活に慣れていかないと。

「ニャあ、マタタビ石を探してくれニャ」

少し歩くと小白虎が駄々をこね始めた。

「だめ！今日は、なんとしてもこの森を越えるんだから」

「ニャレがマタタビ石を食らえば、白虎になつてこんな森ひとつ走り抜けるのにニャ」

「え、本当!? 僕は背中に乗っていいんだよね？」

「人間風情がニャレの背中に跨^{またが}るだニャんて許されるわけないニャろ！だがまあ、マタタビ石のためなら、やぶさかではないがニャ」

白虎に跨り、森の中を疾走するのを想像する。うん、乗ってみたい！

「よし！背中に乗せる約束だからね！」

僕は双剣を持ち、先日マタタビ石を探した時のことをイメージしながら、スキルを発動する。

『『ダウジング』 “マタタビ石”』

双剣が光り出すが、この前と違って飛んでいかない。

「……」

「どうニャ？ライカ」

「うーん、だめだ。反応が無いみたい」

「ちつくしようニャ！この辺りもめつつきりマタタビ石が減ってしまったニャア」

「しょうがない。僕も白虎の背中に乗りたかつたけど……諦めて歩こう」

小白虎が言うには、今の僕たちの足だと、この森を抜けるまであと一日程度かかるらしい。

「ああ、お腹へったな。料理長さんの料理が恋しいよ」

一日中歩き通して、日もかなり傾いてきた。

「ニャレもマタタビ石が恋しいニャ」

「昨日食べたばかりじゃないか」

「あんな純度の低いものじゃニャくて、高純度のマタタビ石がいいニャ。もう二百年ほど齧^かつておらん^らんニャ」

「……ああ、食料どうしよう。狩りの技術もないしなあ。木の実も無さそうだし」

「阿呆だニャア。なんのための『ダウジング』だと思っておるニャ」

あ、そうか。小白虎の餌を探せるなら、僕の食料だつて探せるはずじゃないか。

僕は剣を抜き、スキルを発動する。

『『ダウジング』 “野ウサギ”』

キイイイイン。

勢いよく飛んでいく剣を追いかけていくと、野ウサギがしっかりと仕留められていた。

このスキルめっちゃくちゃ便利じゃないか。

『『ダウジング』 “果実”』『『ダウジング』 “きのこ”』と、僕が次々とスキルを発動させると、おも

しろいほどに食材が集まる。

「『ダウジング』ってこんなに使えるんだね」

「六つ星だからニヤ。昔『ダウジング』を使っていた人間は、もつと狭い範囲だったニヤ」

「過去にも六つ星のスキルを授かった人っているの？」

「うーん。またそのうち機会があったら話してやるニヤ」

このあとは、ただ焼いただけの食材と果実を食べて、早々に僕たちは眠りについた。

◆◆

「二千年もの間、共存関係を築いて来た私と袂たもとを分かつというのが、貴様らの総意……か」

「ああ、我ら四聖獣に貴様一人で、勝てると思っておるのか？」

「所詮、元は動物か。浅はか極まりない。それでは私は、貴様らの必要なものを奪ってやろうぞ。

飢えに苦しむがよい。永く苦しい持久戦といこうではないか」

◆◆

「ニヤろめー！ー！ 切り刻んでやるニヤ」

ゴンツ。

僕は夜中に叫ぶ小白虎に起こされたことに腹が立ち、ゲンコツを食らわせる。

「うるさい小白虎！ どんな寝言だよ」

「フニヤ……痛てて。おい、ライカ。人間の分際でニヤレを殴るとはどういう了見ニヤ」

「まだ夜中だぞ。いい加減にしてくれよ」

「ウニヤ、すまニヤい。ちよつと嫌な夢を見てニヤ……」

本当に変な猫だ。神に等しき存在だった？ 寝言を言うただの猫じゃないか。

そりゃあ白虎の時は心強い味方だけど、マタタビ石が無い時は、ただのうるさい猫だ。今後が心配になってしまふ。

「ふわあ、もう一眠りしよう。もう、寝言は勘弁してくれよな」

「ウニヤ……」

森の朝は心地が良い。木漏れ日を浴びて光る朝露や鳥の囁りが、爽やかな気持ちにさせてくれる。

僕は昨日収穫した果実を齧りながら、出発の準備を整えた。

「さあ出発しよう！ 小白虎」

「ウニヤ。途中、マタタビ石を探しながら行くニヤ」

「はいはい。わかったよ」

僕たちは森を抜け、ホワイトス家の別荘を目指して歩き始める。

途中、何度か『ダウジング』したが、マタタビ石は見つからなかった。

そんなこんなで森を抜けると、開けた土地に出た。
小川に沿って歩いていくと、やっと別荘が見えてくる。
これが目指していた別荘だろう。

「なんだか……廃墟みたいニヤ……」

第三章 ライカの別荘暮らし

「う、うん。僕ら今日からここで暮らすのか……」

「絶対に嫌ニヤああああ」

一体、何年間放置すれば、こんなに朽ち果てるのか。屋根は所々穴が空き、扉も一部欠けている。ボロボロの別荘を目の当たりにして、僕と小白虎は開いた口が塞がらない。

「ニヤあ、ライカよ……」

「言うな、小白虎。言いたいことはわかる」

取り敢えず、修繕と掃除が必要だ。少なくともこの別荘をなんとか寝泊まりくらいはできるようにしなければならぬ。

僕は草がボーボーに生えた庭を抜け、別荘の扉を開ける。

「こりゃ、相当ひどいなあ。片付けをしなければ寝ることもできなそうだ」

「そうだニヤ。埃もひどいしニヤ」

僕は早速片付けに取り掛かる。

明らかに使わないであろうガラクタやゴミを運ぶ僕を、小白虎は日の当たる窓辺に寝転がりながら眺める。

「おい、手伝ってくれよ。猫の手も借りたくらいなんだから」
 「実際の猫の手なんて、借りてもニャンにもニャらんぞ。この体じゃ物も運べニヤい」
 「たしかになあ。でも、なんかサボっているやつがいるのは目障りだよ」
 「貴様、四聖獣であるニャレのことを目障りとは……不敬だニャ」
 猫の手は役に立たないけど、それを言うなら、子供の僕だって大した労働力にはならない。でもここには猫と子供しかいないのだから仕方ない。

結局日が暮れるまで作業をしても、寝る場所を確保するのがやっとだった。

「これじゃ野営と大して変わらないね……崩れた天井から星が見えるよ」

「この分ニャと、しばらく掃除の日々が続きそうだニャあ」

僕は次の日も掃除に明け暮れる。

小白虎はというと、僕が掃除している姿を見るのに飽きたらしく、別荘の周りを散歩してくるぞうだ。今頃、蝶々ともじゃれているんだろうさ。

書齋らしき部屋へ移動すると、小さな宝石箱を見つけた。こういうものを見つけると心が躍る。

そつと開けてみると、緑色の石が宝石箱の中で輝いた。

「これ……森で見たものより色が濃いけど、多分マタタビ石だよな」

僕は、机においてある羽ペンを二本、手に取り、スキルを発動する。

『『ダウジング』「マタタビ石」

キィィィィン。

羽ペンは、宝石箱の中で輝く石の方向を向く。

「やっぱりマタタビ石だ。というか、羽ペンでもできるんだな……」

スキルについての新たな発見だ。フライパンにスキルを付与した料理長さんの話を思い出す。

「ライカよ、片付けは進んでいるかニャ？」

「全然進まないよ。それより小白虎、これを見てみるよ」

僕は小白虎にマタタビ石を見せびらかす。

「ウニャニャニャ！ マタタビ石じゃニャいか！ 確かたぞ。早くニャレによこせ」

「別にいいけどさ。これ食べて白虎の姿に戻ったら、片付け手伝ってくれる？」

「ウニャ！ 手伝うぞ！ 手伝うから、早くよこせニャ」

「よし！ 約束だぞ」

マタタビ石を小白虎に渡すと、小白虎はそれを器用に転がしながら家の外に持っていく。

「なんですぐに食べないの？」

「阿呆め。家の中で齧ったら、ニャレの体の大きさで、この家が壊れてしまうニャ」

「あ、そうか」

庭に出た小白虎は、嬉しそうにマタタビ石に齧りつく。

霧が小白虎の体を包むと、みるみる巨大化していき、白虎の姿を取り戻した。見上げるほどの大きさは相変わらずの迫力だ。

「ガルルル……美味しい！ 美味しいぞ！ 至福の時間じゃ」

白虎は地面に寝転び、満足そうな顔をしている。

「さて、約束通り片付けを手伝ってもらうからな」

「わかっておる。我にまかせておけ」

そう言って白虎は立ち上がると、自分の毛を塗り、辺りにばら撒いた。

その毛は、徐々に人型へと変化していく。

「な、何？ こいつら」

「ガハハハ。我の眷属けんぞくじゃ。昔はこうやって、よく人間どもの手伝いをしてやったもんじゃ。懐かしさ」

白虎が言うには、この国が建国されるよりはるか昔、この地の人間は白虎を崇拜していた。白虎はマタタビ石をもらった礼に、眷属を遣わし、建築や農業の手伝いをしていたのだとか。

「七、八、九……十体か。まあ、この純度のマタタビ石なら、こんなものか。それじゃあお前ら、頼んだぞ」

眷属たちは黙って頷く。人語を理解はできるが、話すことはできないとのことだ。

眷属たちは白虎の言葉で、別荘の掃除や修繕を始める。

その働くスピードと丁寧さに僕は感動して、白虎に話しかける。

「すごいよ！ 白……」

振り向くと、そこにはいつもの小白虎がちよこんと座っていた。

「さて、労働はこやつらに任せて、ニヤレたちはマタタビ石探しに出かけるニヤ」

「……うん。食材も無いことだし、そうしよう！」

森の中は、広葉樹が葉を広げ太陽の光を遮っているため昼間でも暗い。

「ねえ、あの眷属たちは、いつまで働いてくれるの？」

「あいつらの中に流れるニヤレの魔素……エネルギーみたいなものが切れるまでだから、長くて二日ってところかニヤ」

「へえ。意外と、短いんだね」

「ニヤに。二〜三日森でマタタビ石を探して、帰る頃には仕事は終わってるはずニヤ」

この森はとにかく広大だ。しかも、どこを見渡しても木、木、木。同じ景色ばかりで、普通なら迷ってしまうだろう。

しかし、この森に三千年も居る小白虎、更には僕の『ダウジング』もあるから、心配は要らない。

僕たちは野営をしながら二日間森を散策し、獣や小動物を狩り、果実やきのこを集めた。

「ライカ、マタタビ石が欲しいニヤ」

「わかったよ。『ダウジング』マタタビ石」

キイキイイン。

「あ、反応してる……」

「ウニャ！ どこニャ！ 早く剣を飛ばすのニャ」
「うん」

僕たちは、マタタビ石に向かって飛んでいく剣を追いかけて走る。

「はあはあ、随分遠くなんだな。剣が全然止まらないよ。もう三十分以上走っている」
「ウニャ、ライカの『ダウジング』の射程範囲は一体どうなってるニャ」

途中、剣を見失いそうにもなったが、なんとか追いついてマタタビ石を発見できた。

「さあ、早くニャレに齧らせるのニャ」

「いざという時に、取っておいた方が良くないか？」

「ニャあに、また探せばよからう」

「いや、やっぱだめ！ おあずけ」

随分森の奥までできてしまった。帰り道に魔獣に遭遇するかもしれないし、その時のために温存しておくべきだろう。

「魔獣の心配をしておるのニャろ？ 白虎に戻ったニャレなら、別荘までひとつ走りニャぞ」

「背中に乗せてくれるの？」

「人間風情を背に乗せるのは嫌ニャが、背に腹は代えられニャい」

「よし！ お食べ！」

「愛玩動物に餌を与えるような言い方をするニャー！」

小白虎は文句を言いながらも、マタタビ石に夢中で齧りついた。

白虎の背に乗り森の中を駆ける。その速さは凄まじく、次々と景色が流れていく。結局二十分程度で、二日間かけて進んだ森の奥地から別荘へ戻ることができた。

「は、速いね……さすが聖獣」

「ガハハ、当たり前であろう。我は白虎様だからな」

別荘に戻ると、目を疑う光景が広がっていた。ポロポロだった壁や屋根が作り変えられ、伸びた庭の雑草は綺麗に刈られている。

「え！ すごい。おんぼろの別荘が、立派な屋敷になっているじゃないか！」

「うむ。良い仕事じゃ。我が眷属たちは……さすがにもう消滅したか」

十体いた眷属の姿は見えない。

白虎が小白虎の姿に戻ったので、僕たちは屋敷の中へと入る。

見違えるような豪華な内装に生まれ変わった屋敷の中に、人影を確認する。

女の人型の眷属がメイドの格好をして立っていたのだ。

「おかえりなさいませ、白虎様、ライカ様」

「しや、喋ったー!!」

「お前……今、喋ったよニャ」

「ハイ、白虎様」

小白虎はかなり狼狽している。それは僕も同じだ。

二日前は猫の獣人のような姿で、表情も無く、黙々と働いただけだった眷属。それが今眼の前に居るのは、名残りはあるがほとんど人間そのものだ。

「ライカ、お前の耳にも聞こえたよニヤ。コイツたしかに喋ったよニヤ」

「う、うん」

「他の眷属たちは、どうしたのニヤ？」

小白虎がメイドの格好をした眷属に問いかける。

「皆、消滅しましたが、なぜか私だけ消滅しなかったのデス」

僕たちはこの眷属に、二日間のことを聞いた。

僕たちが森に旅立ったあと、眷属たちは膨大な量の仕事をこなしていった。そして、一通り作業を終えると、一体、また一体と崩れ去っていったそう。

「ワタシも意識を失い、そのまま消滅するのだと感じていまシタ」

「ウニヤ。それからどうなったのニヤ」

「デモ、次に目覚めると、人間らしい体となっていたのデス」

眷属の話聞き終え、小白虎はしばらく黙っている。

それから怪訝けげんそうな顔で首を傾げ、再び眷属に問いかけた。

「お前、本当にニヤレの眷属ニヤのか？」

「ハイ。真正正銘しやうしんしょうめい、白虎様とライカ様の眷属デス」

「白虎と僕？ 僕の眷属でもあるの？」

僕の眷属だつて？ 一体、どうということなのだろうか。僕は予想外の回答に咄嗟とつさに聞き返してしまふ。

「ワタシの体には、白虎様の魔素とライカ様のマナが今もしっかりと流れておりマス」

白虎の毛から生まれたのだから、白虎の魔素が流れているのはわかるけど、なんで僕のマナが……頭が混乱する。マナというのは、僕ら人間がスキルを使う時に必要なものだから、『ダウジング』と何か関係があるのかな？

「たしかに、最初からライカの名前を知っておったしニヤ」

小白虎が不思議そうに言う。

「うん……それは不思議だね。なあ、小白虎、今までにこういうことはあったの？」

「ウウニヤ。三千年生きてきたが、こんなことは初めてニヤ」

更に、訝いぶかしげな表情の小白虎は、頭を抱える。

「うーむ。そんなことがあるのかニヤあ……んニヤ。まさかニヤ……」

これ以上考えても答えは出なさそうなので、ひとまず、僕は森で獲ってきた肉と果実をキッチンへと運ぶ。

今日は朝から何も食べていなくて、もう空腹の限界だ。

「ああ、ちゃんとした料理が食べたいなあ」

「まったく人間というものは、味にこだわりが強いニヤあ」

「多分、小白虎も料理長さんの料理を食べたら美味いって言うはずさ」